

307 肺癌の staging と骨シンチグラフィ

油井信春, 戸川貴史, 木下富士美, 小坪正木,
秋山芳久(千葉県がんセンター核医学診療科, 物理室)

肺癌は骨転移の頻度が高いものとして知られ骨シンチグラフィの有用性が高いと考えられる。我々は肺癌の staging IVに対する本検査法の有効性を明らかにする目的で術前検査とし行った症例の結果を検討した。千葉県がんセンターを受診し、肺癌の確定診断の得られた症例で、治療開始前に骨シンチグラフィを施行できた1977年以降の240例について分析した結果を報告する。

我々の症例では約30%に骨異常所見が得られ、偽陰性は2例であり、この検査法の転移検出効果は高いと考えられた。TおよびN因子と骨転移の関係、組織型との関係、M因子の中で骨転移の占める割合についても調べた。治療前にすべての患者に骨シンチグラフィを行った場合、異常所見の得られる割合は高いが、無症状で他の検査法では検出できない転移の確定診断をいかにして得るかが問題であり、シンチグラム所見のみから判定をくだせるような診断能力が必要である。
